

第九章 東北方言からアイヌ語へ

ヒラカ（下駄）

「蝦夷語箋」にはヒラカ、バチラー師の辭典にはヒラッカとある。日本語では、ヒラカ（秋田・山形・青の飛騨）ヒラッカ（長野・岩手・伊豆・駿河・遠江・三河・廣島）ヒラコー（廣島）ヒラコ（能登）（ラコ（能登））ヒラッカーゲタ（遠江）などと言ふ。東海道や廣島縣のは駒下駄とあるが、その他ののは單に下駄とある。ヒラと聞いて、「平たい」を聯想した結果、摺り減らした下駄をヒラカ（上總）ヒラカコ（盛岡）ヒラッカ（沼津）といふ所もある。ヒラカは琉球にもあつた。余象斗等の「海篇正宗」（南島方言資料所收）に靴を「匹藍加」と譯してある。

室町時代の京都にはヒラカケといふ言葉があつた。「辨慶物語」に、

また左のつらにひらかけを書きて

辨慶はひらかけにこそ似たりけれ

目より鼻緒を上げて履かばや

とある。「義經記」には、この狂歌を「辨慶はひらあしだにぞ成りにけり、つらを踏めども起きも上らず」としてある。ヒラカケも、ヒラアシダも同じ様なものだらう。ヒラカは、このヒラカケの下略である。下駄は日本獨特のものだから、ヒラカが日本語起源である事は言ふまでもない。

なほ、アイヌ語で草履をモノクシャといふが（蝦夷語箋）、これも日本語のモノクサから來たものである。「大的體拜記」や「源平盛衰記」に半物草とある。

バツタキ（蝗）

蝗をアイヌ語でバツタキといふ。「蝦夷語箋」にはバツタキとあり、ばつたと譯してある。アイヌは清濁の區別を意識しないから、どちらでも同じ事である。北海道と奥羽（山形以外）では、蝗をハタギといふ。バツタを意味する所もあり、或は同じ町で兩方を意味する所もある。小野蘭山は、南部や松前で、イナハタギといふのが蝗で、單にハタギと言へば、蝗とばつたの總稱であると言つてゐるが、「御國通辭」（寛政、南部方言）には、反對に、イナハタギをバツタの事としてある。「物

類稱呼」「本草綱目啓蒙」「菰莪」が、揃ってバツクの意とした仙臺のハッタギも、近頃の方言集を見ると、蝗とある。要するに、どちらでも良いのだ。さて、ハッタギは白河の關以南には無いが、これに近いものに、蝗方言のカタギ（三重縣尾鷲町）ガタギ（尾張・伊勢・大和・紀伊）があり、また飛蝗方言のガタギ（伊勢・大和）ハッタゴ（岡山縣上道郡）がある。蝗は稻に棲む蟲であるが、蝦夷には田無く、稻も無いから、日本語の方が先だらうと思ふ。

アイヌ語では蝗をバクバクともいふ。日本語では、飛蝗をハタハタ（倭名抄・大阪市・紀伊・播磨・備前・讃岐・昔の阿波）といふ。これも、日本語からアイヌ語になつたものだらう。たゞ、現在、東北方言に無いのは残念である。

アイヌ語では蝗をタカタカともいふ。これに同じ言葉は日本語には無いが、近い言葉ならある。タカ（土佐・大分・鹿兒島）タカムシ（大分）タカンボ（土佐）オタカ（大分・長崎）イナダカ（宇和島・土佐）イネタカ（土佐）が是である。飛蝗の方言にも、タカ（長崎市）クソダカ（同）クマダカ（土佐）タカズ（種子ヶ島）タカムシ（大分）オタカ（大分）がある。

パンチョ（大工）

アイヌ語で大工をパンチョといふ。「蝦夷語箋」にはパンチョーとある。アイヌ語には清濁の區別が

無いから、どつちでも同じ事である。これは日本語の番匠の訛である。昔、飛騨や大和の國から、毎年順番に京都に上ツて、木工として勤番した。だから、木工を番匠といふのである。今もバンジョー（佐渡・甲斐・會津・千葉）バンジョ（山形・駿河・三河）バンショー（相模）パッチョウ（千葉・長野）等といふ。

イチヤリ（箆）

「蝦夷語箋」にある。パチラーさんの辭典には A round wicker basket. A sieve. 篩と譯してある。日本語では、中部地方に、イザアル（山梨）イザル（山梨・長野・駿河）イザロ（伊豆）イジャール（山梨・信濃）イジャル（長野・山梨・駿河）イジャロ（長野・駿河）エザロ（信濃）エジャール（長野）エジャロ（長野）がある。一般に箆であるが、伊豆韮山町のイザロは米麥などを磨く箆であり、駿河のイザロ、イジャロ、イジャルも同様である。「新撰字鏡」の伊佐留は穀を盛る竹器なりとある。今日は、山梨・長野・静岡三縣に限られて居るが、昔は東北地方にも在つたのだらう。東北地方では、箆をジャルと發音する所が多い。だから、イザルもイジャルとなる理屈である。これがアイヌ語に這入ツてイチヤリとなつた。アイヌ人は清濁を區別しないから、イチヤリも、イヂヤリも同じ事である。

カマ（鐵瓶）

福島縣以外の東北全部にある。

マキリ（小刀）

アイヌ語で、小刀をマキリ、又はバキリといふ。マキリは、青森・岩手・秋田・能登・出雲にある、能登・飛騨には、ツマキリもある。易林木節用集、器材の部に、爪切、爪打刀とあるのを想起す。マキリは、ツマキリの頭音脱落だらう。岩手縣筆石村のマツケ（獵人鉈）も關係あるか。

この序に、金屬に關するアイヌ語を調べてみよう。先づ、カネ、又はカニといふのは金屬及び金錢のアイヌ語である。黄金はコンガネ、銀はシロカニ、赤銅はシヤクント、銅はフレカニ（赤金の意）、鉛はヤイカネ、水銀はシロカネツカ（白金水の意）、鍛冶屋はカニキグル（金打人の意）、鐵槌はカニツチ、兜はカニボンカサ（金の小笠の意）、鉈はカナ、鉈はナタ、大鉈はカマナタ、鉈はチ、牙環はニンカリ（接するにミミカネの訛）、刀の鏑はセツバ、切羽はコセツバ等、日本語が非常に多い。金屬精鍊の法を知らぬアイヌは、鐵器は日本から輸入する外に方法は無かつたはずである。マキリだけが例外をなすとは考へられない。

キツチ（槽）

ベチラーさんの「アイヌ語英和辭典」に、キツチを「槽」「盤」と和譯し、*A manger. A trough* と英譯してある。キツツは東北地方から越後・常陸にかけて在る。津輕のキチは板製の四角な水槽、或いは圓木を穿つて、水や秣を容れるものである。青森縣三戸郡では、木箱様のもの、或いは水の湧き口に据えて置く井戸枠様のもの、或いは米櫃をキツチといふ。盛岡市では、臺所に置く水槽、又は湯屋の浴槽をキツツといふ。米櫃は、盛岡でコノグツ、和賀郡でキツチである。これから南の方、仙臺領（岩手縣の一部、宮城縣の全部）では、板倉をキツツといふ。秋田縣では、北の仙北郡は水槽で、南の雄勝郡は板倉である。磐城平町では、艚などを容れる作りつけの箱をキツツといひ、磐城泉村では金庫代りに使ふ丈夫な木の箱をキツツといふ。常陸多賀郡のキツツは木櫃とあり、新潟市附近のキツツは、川魚などを飼つて置く厚板の水槽である。

奥羽地方では、北部は特別寒さがきびしく、冬季水廻の水が凍るので、今なほ木製のキツツを使つてゐる。南奥羽では、水瓶に押されて、水槽のキツツは廢物となつたので、キツツといふ言葉は色々の物に轉用されたと見える。

「伊勢物語」に「夜も明けば、きつにはめなむくたかけのまだきに鳴きて、せなをやりつる」とある。このキツは水槽である。狐といふ解釋は悪い。全體の意味は「夜が明けたら、水槽に投げ込んでくれよう、腐れ鶏め、暗い内から鳴いて、見さんを逃がしてやつたよ」である。鶏の宵鳴は不吉であ

る、その場合には鶴に水を掛ければよいといふ土俗は今も各地にある。

コンカ（大桶）

酒を容れる大桶をトノトコンカと言ふ。トノトは酒のアイヌ語である。大桶をコガといふ所は東北・全部・關東（群馬・埼玉以外）・越後・長野・山梨・能登・志摩・淡路・徳島にある。關東では主として裾風呂に限り、能登では肥桶にいひ、大分縣では肥甕と言ふ。廣島縣佐伯郡で、大きな釜をコガといふのはやゝ意外である。「伊呂波字類抄」に、桶をコカと訓じ、酒器也と註してある。「下學集」の増補にも同じ字をコガと振假名し、桶也と註してある。「書言字考」には、同じ字をコガともクルとも訓んでゐる。北九州では桶をコガイといふ。

ケラ（蓑）

「蝦夷産業圖説」に、「草をあみて造れる衣をケラといふなり。是は寒氣の強き頃風雪をしのがむために、本邦の人の蓑を用ふる如く着用せり。ケラと稱する義は解しがたし」とある。青森・岩手・秋田三縣でも、蓑をケラといふ。「延喜式」に蜷蓑とあり、「本朝世紀」久安四年四月十八日の條には、蜷蜷蓑と共に、蜷蜷笠も見える。なるほど、毛がバサ／＼して、蟲のケラによく似てゐる。東北地方では、マダの木（しなの木）の皮で作る。岩手縣羣石郡などでは肩から後身にだけ垂れたものをケラ、

腋から胸をも包むものをミノと、使ひ分けて居る。

ビカタ（西南風）

北海道・青森・岩手・秋田・山形・新潟・富山の海岸で西南風をヒカタといふ。穢には、西風・東南風・南風・西北風をいふ所もある。いづれにして、西南を基準として、左右に各九十度の誤差があるに過ぎない。然るに、西日本に行くと、意外と思ふ程違つて居る。出雲美保關のヒカタは夏の南風である。長門田萬崎村のは東南風である。山口縣豊浦郡神田村では梅雨季中の東風をヒカタコチといふ。石見邑智郡市山村のヒカタは真東から北寄りの風である。筑前糟屋郡新宮湊では東北風をヒカタゴといふ。しかし、丹後中郡や長門阿武郡では、東北地方と同様、西南風をヒカタと言つてゐる。

萬葉集、卷七に、「あまぎらひ、日方吹くらし、水葦の岡の水門に波立ちわたる」とある。「夫木集」卷十九にも、「ひかた吹くよさの浦波高からし、みぎはの千鳥、群れて立つなり」とある。ヒカタの語源は判らないが、とにかく、日本語起源である事は疑なからう。しかし、服飾・器具の名と違ひ、風の名に外来語を使ふのは解し難い。これは日本の漁船に、アイヌが助手として乗込んで居る内に、日本の漁夫から教はつたものかも知れない。一體、風位の名は漁業言葉とも言ふべく、漁夫以外の一般人は知らぬ方が多いものである。従つて、海岸を離れた内陸部には、風位の名稱は殆ど無い。

ナンヂミ (淫賣婦)

東北地方のナジミ (情婦の意) から來た言葉である。ナジミ (仙臺の昔・岩手・淡路・周防・久留米) ナジミ (肥後) ナジミ (石見) などと言ふ。何れも情婦の意である (肥後南の關町では情夫も)。越中・飛騨では戀愛結婚をナジミゾビといふ。親友をナジミといふのは一般だが、「昔ナジミ」 (昔の情婦、今は人妻) とツマケ (讀き) の石は憎いながらも後を見る」 (岩手縣紫波郡の民謡) などのナジミには特殊の意味がある。

ペコ (牛)

ペコともいふ。ペコは東北全部・下野・丹波・丹後・但馬にある。常陸久慈郡ではベイコ、甲斐でペゴコといふ。子牛のベイコは分布が違ふ。アイヌには牛が無いから、ペコは東北方言から這入つたものに違ひない。

チャベ (猫)

バチラーさんによれば、北海道の日本人の間にも聞かれるといふ。内地では、チャベ (津輕・秋田) チャベ (秋田の小兒・山形) チャンベ (上總) チャメ (山形) チョボ (上總) チャンコ (上總) チョイ (長野) チャコ (秋田・山形) チャコ (秋田) チャ (秋田の小兒) チャチャ (秋田) チャコ (山

形) チョコ (越後) チョコ (越後) チョン (肥後の幼兒) 等といふ。これは猫を呼ぶ聲から來たものである。呼び聲は、秋田縣鹿角郡でチャーチャチャ、山形縣東田川郡でも同様、越後吉田町でチョチャ、遠江でチョマ、又はチョヤヤ、肥後南の關でチョンといふ。

八丈島・栃木縣・茨城縣では、猫メ、牛メ、蟻メ、鳩メ等と、動物にメを附ける癖がある。チャメのメは、けだし是である。そのチャメがチャベとなり、東北人からアイヌに傳へられたのだらう。アイヌ語でメコとも言ふが、是もネコの訛である。

タシロ (山刀)

「蝦夷語彙」に山刀やまなことあり、バチラーさんの辭典には大なる小刀とある。「青森縣方言訛語」津輕の部に「たしろ 鋸の如き刃物」とある。アイヌ語で、小刀をタシともいふ。按ずるに、キリダシのタシと同じ言葉である。

ラッチャコ (行燈)

「蝦夷語彙」にある。蠟燭の訛である。安原貞室の「かたこと」に「蠟燭を、らうそくと書て、口に唱ふるはらつそくよしと云り」とある。易林本節用集にも、ラツソクと振假名してある。岩手縣氣仙郡では松脂蠟燭をラッチャコといふ。麻痺に塗リ、束ねて、火を點けて、舊盆に佛に手向ける。

ミンツチ (河童)

バチラーさんによれば、ミンツチは傳説的動物の一種で、半人半獸であつて、湖や川に棲むと言はれて居る。川や池や湖で多くの事件をひき起すたちの悪い人魚の一種で、人間の様な體を持つては居るが、手足の代りに、蹄を持つて居るといふ。また、人間の腸を引抜いて食ふとも言はれて居る。アイヌはこいつで子供等を嚇して、川の近くに行かない様にする——これで見ると、アイヌのミンツチは日本の河童の丸移しに過ぎない。文化の移動がこんな無形の土俗信仰にまで及ぶとは意外である。アイヌが、いかに日本文化に心酔して居たかといふ事が是で判る。『蝦夷語彙』には、ニンツチとある。アイヌ語でカッパともいふ。

ミンツチはミツチの訛である。『倭名類聚鈔』に蛟を美都知と訓じ、仁徳記に大蛇をミツチと振假名して居る。ミツは水、チはヲロチ、クグノチ、カグツチ等のチで、神といふ意味だらう。即ち、ミツチは水神である。河童のことを、青森縣でメドチ、昔の加賀・能登でミツシ、鹿児島縣でミツツドンといふ。何れもミツチの訛である。アイヌ語へは、青森縣から、ミツチといふ形で這入つたのだらう。では、ミンツチのンは何處から來たかと言ふに、これは、東北人の鼻母音を眞似しそこねたのである。東北人は、窓をアンザ、窓をマンド、指をユンピといふ風に、濁音の前に來ると、必ず鼻母音にする。

「鼻に掛ける」といふのは此の事である。他縣の人が聞くと、アンザ、マンド、ユンピと聞こえるのであるが、しかし、實際は、このンは一音節にはならない。所が、アイヌ人は、これを一音節にしてしまふ。

東北音

あいぬ語

煙草

タ(ン)バコ

タンバコ

黄金

コ(ン)ガネ

コンガネ

小袖

コソ(ン)デ

コソソデ

類冠り

ホッカ(ン)ブリ

ホッカンブリ

小豆

ア(ン)ヅキ

アンヅキ

馴染

ナ(ン)ザミ

ナンチミ

ミンツチもこの例に外ならぬ。

カナ (木綿絲)

東北・北陸道でも、カナ(青森・岩手・山形・福島・富山・加賀・飛騨)カナイト(津輕・福島)カンナ(青森・山形)カシナイト(宮城)などといふ。『蝦夷語彙』にはメイトもある。メイトはマヒ

イトの訛かと思ふが、或ひは、ヌキソ（拔麻）の音便ヌイソの訛かも知れない。

ホイト（乞食）

唐言語の條を見よ。

ワッパ（曲げ物）

東北（宮城・福島以外）・新潟・長野・富山・三重にある。主に、辨當として使ふ。

シトキ、シト（餅）

「アイヌの語」に、シト、シトキ（餅）とあり「蝦夷語彙」にはシツトとある。津輕のシトギは、舊の正月に、餡或は鹽小豆を入れて造り、熱い灰の中に入れて焦して食べる餅である。盛岡のシトギは、米の粉（主としてアラモト）を湯でしめして、それに搗いた大豆を混ぜて作つた餅である。熱灰の中に入れてホド焼にして食ふ。蒸しても食ふ。青森縣三戸郡では生でも食ふ。岩手縣九戸郡長内村で、おからをシトギといふのは轉用だらう。「和訓栞」の頃は、筑後でお祭の時に作る餅をシトギと言つて居た。「倭名抄」祭祀具に、黍を之度映と訓じ、祭餅也と註してあるから、これが原義だらう。「新撰字鏡」には、米扁に屑と書いた字を「志止支」と訓じてある。内膳司式にも「志登伎」がある。下つて、慶長の長崎版日葡辭書にもシトギが見える。新井白石は白麴シロコの訛だらうと言つてゐる。

カスベ（えひ）

えひ（鱒）をアイヌ語でカシベ、北海道でカスベ、青森縣でカスベ、岩手縣釜石町でカシビといふ「御國通辭」に「千ゑい かすべ」とある。

マタギ（獵師）

吉田巖氏や佐々木長左衛門氏によれば、アイヌ語で獵師をマタギといふ。この言葉は青森・岩手・秋田・山形の四縣にもある。この地方では、マタギは部落を成して居る。バ氏の辭典には見えない。

キトビル（行者にんく）

佐々木さんの「アイヌの語」に左の一節がある。

アイヌは背主に鹿、鮭、鱒など動物の肉を好みて食し、當時にあつては鳥獸も豊かにして、之を獲るまた容易で植物性の食物は副たるに過ぎなかつた。……植物性の食物ではウバエリウバエリ、キトビル *Kitpur*（ギョウジ・ニンニク）等を食し、南西部地方のアイヌは僅少の土地を耕し、粟稗など作り、以て食を補ひ、或は酒を醸すに至つた。

バチラーさんの辭典には、*Kito, Kito, Pukusa* の三語をあげてある。岩手縣遠野町では、行者にんくを、キトウビル（祈禱蒜）といふ。アイヌ語のキトビルは是を訛つたものだらう。この植物には、

行者にんにく、飯山にんにく、飯山びる、天台にんにく、天台びる、禪定にんにく等と、妙に抹香臭い名が多い。これは天台宗の行者が祈禱用に使ったといふ様な山來があるのだらう。

以上の二十三語を縣別に統計してみると、岩手十八、青森十七、秋田十三、山形十一、宮城六、福島七語、新潟五語となる。これで見ると、奥羽地方の内でも、北半分が特に多い。北海道に移住又は出稼したのも、主として、この地方の人々である。アイヌは、この北奥の移民から日本文化を吸収したと見える。

次に、以上の言葉がアイヌに遺入った時代を考へてみる。ヒカタが「萬葉集」にあるからと言つて、これがアイヌ語になつたのは萬葉時代であるかどうかは判らない。この言葉は今も東北地方にあるから、最近アイヌ語になつたのだと考へる事も出来る。ケラ、ミヅテ、シトギ、キツ等、何れも同様である。これに反して、廢語の方は相當古い事は確である。例へば、筑のイザルは今日東北地方一帯に無く、古い方言集にも見當らないから、これがアイヌ語化したのは決して近頃の事ではない。アイヌ語で麴をカムタチといふ。カムタチは和名抄に見えるが、今日の方言には全く見當らないから、早く廢語になつたと見える。「蝦夷語箋」に、振舞をマラプトと譯してある。これは和名抄にある末良比止

(客)の訛であるが、これも今の方言には無い。たゞし、岩手縣遠野町で、からすが來客を豫告する様に鳴くことを「マロウド語る」といふ方言はある。

アイヌ語で鹽をシッポといふ。これは無論日本語起源に違ひないが、しかし、シオからシッポとはならない。シッポは東北人が *shippo* と發音するのを聞いて、それを眞似たのだらう。それは餘程古い時代に相違ない。東北でも、今は無論シオである。ある人曰く、「鹽の古音はシポである。アイヌ語のシッポはその古音を傳へたものである」と。しかし、そこまで溯ることは無理である。北海道に於ける日阿文明の接觸はそんなに古いとは思はれない。

アイヌ語にアイサといふ鳥がある。鴨類の一種で、頭の上に一總の羽があるといふ。これは日本語アキツの訛である。しかし、アキサがアイサと訛つたのは日本で起つた事で、アイヌ人の責任ではない。「萬葉集」卷七に「山際に渡る秋沙の往きて居む、その河の瀬に浪立つな、ゆめ」とある。これが順徳院の「八雲御抄」になると「秋紗 アイサ」となる。「賴政集」には「すみ上る月の光に横切れて、渡るあきさの音のさやけさ」とある。賴政の頃までアキサと言つたとすれば、アイヌ語のアイサは、賴政以後に遺入つたものである。

アイヌ語にホイト(乞食)といふ言葉がある。これは陪堂の宋音で、禪宗用語だから、鎌倉時代以

後の言葉である。ヒラカ（下駄）マキリ（小刀）コガ（大桶）モノクサ（草履）等も武家時代の京都語である。この時代の言葉がアイヌ語には一等多い。元禄以後の新語は、蝦夷語の中には殆ど見出されない。即ち、アイヌ人は、慶長頃までの間に、必要なだけは、一通り、日本語を吸収してしまつたのだらう。あとは、飛んで明治以後となる。

×

×

×

パチラー師の辭典に無いもの、又は、有つても疑問があるものについて、金田一博士にお尋ねした所、次の御返事をいただいた。質問と並べて掲げる。なほ、アイヌ語が元か、日本語が元か、使用者はどういふ考で使つてゐるかをもお尋ねしたので、各項にその旨が見られる。

問（一）吉田巖氏や佐々木長左衛門氏によれば、アイヌ語で蝗をバッタキといふ由（パチラー師の辭典にはバッタキは無く、蝗及びきり／＼すのアイヌ語として、パタ、パタパタ、パタオアタ、タカタカがあります。）「蝦夷語箋」にはバッタキとあり、ばつたと譯してあります。アイヌ語には、果してバッタキといふ言葉がありますか。その意味は、蝗とばつたの何れですか。又、アイヌに取つて、ハ、バ、バの三は同じ音ですか。

答（一）蝗をバッタキといふのは東北方言をアイヌが取り入れて使用してゐるもの。但しアイヌは

pat, pat, 反復形 pat-pat は跳ねる意味で、それで、イナゴ、バッタ、キリ／＼スなどをひろくいふ。アイヌ語にババは通音。但し、邦語のハ（fa）は pa と取りこむ。

問（二）イチヤリは、「蝦夷語箋」には箆とあり、バ氏の辭典には篩とあります。どちらが本當ですか。答（二）アイヌ語イチヤリは箆で、曾大兄が考究されたとおり。バ氏辭書にふるひとあるはまちがひ。

（下略）

問（三）酒を容れる大桶をトノトコンカとありますが、單にコンカ（大桶）だけでも言ひますか。又、コンカイと同じですか。

答（三）トノトコンカのコンカは東北方言の借入語。こが——コンカ。勿論たゞコンカともいひます。東北でこがといふのを取入れて。もとアイヌに無かつたもの故。コンカイとあるのは誤りです。

Konka といふか、または okkai といふのです

二つをコンタミネイトして、コンカイと誰かまちがつて教へたか、パチラー氏がまちがつたか、です。okkai といふ方は、盛岡地方で、ホッキエ即ち外店（ホカヤ）といふ語を借入した語です。

問（四）アイヌ語でケラといふ衣服はどんなものでせう。

答(四) ケラ、アイヌにもと無かつたもの。東北語を取り入れてアイヌも用ひます。東北のケラとそつくりのものです。

問(五) チャベもメコも日本語起源の様に思はれますが、猫を意味する固有のアイヌ語は、ユーカラにでも出て居ないでせうか。猫そのものは昔からアイヌに在るのでせう。

答(五) 猫はアイヌに入つたのは新しいことで、もと居なかつたものです。故にチャベは秋田方言を取入れて使つてゐるもの。メコはネコの中日互換です。ユーカラなどに勿論絶対に猫は出て来ません。

問(六) アイヌに行燈はありませんか。アンドンは宋音なので、時代が明になるといふ便宜があります。「蝦夷語箋」に「行燈 ラツチャコ」と見えます。然るに、氣仙郡で松脂蠟燭をラツチャコと云ふ事を知りました。

答(六) アイヌの燈火は(もと無かつたのを)、帆立貝にあざらしなどの脂を入れ、三叉の上に載せ、ボロフキレなどを燈心代りに用ひて、火をこれに點するものだけだつたのです。これが、ラツチャコ、ラツチャコでした。勿論蠟燭の借入語。氣仙のラツチャコも語原は蠟燭でせう。

問(七) 木綿絲は、カンナ、カナ、カーのどれも言ひますか。「蝦夷語箋」にはカーとあります。

答(七) カーは純アイヌ語「絲」で、カナ・カンナは日本語を取入れた木綿絲で、物が全然別物です。

カーの方は、鯨の筋でもよし、麻絲(ハイといふもの即蓼麻)でもよし。

問(八) 「大言海」に、アキアンチはアイヌ語で、アキアン(秋の)チ(魚)の意とあります。これはチュク・チュプ(秋魚)を誤解したのでせう。アイヌ語のアキアンチは鹽鮭ですか、それとも無鹽の物や、生きて泳いで居る鮭を言ひますか。「國語科學講座」の貴文「アイヌ語と國語」に、

鮭の方は、邦語ではアキアジ(秋味)と云はれてゐた。奥州や常陸で、産卵の爲に秋遅く川へ上る大鮭をスケと呼んでゐた。これが、アイヌ語の鮭を呼ぶ今一つの名、即ち「秋味」の稱の原語。チュクチュプ(chuk chep)「秋魚」のチュク「秋」に關係がありさうである。

とあります。この「原語」といふのは單にアイヌ語といふ意味ですか。それとも又、秋味はチュクチュプの譯語である(つまり譯語に對する原語)といふ底意が含まれて居るのですか。

答(八) アキアンチは日本語シヤケのことです。東北人はシヤケを秋味と云つたやうです。生鮭です。大言海のアイヌ語原説は大いいけません。秋味とはアイヌ語の chuk chep の意味をわかつて和解した語です。

問(九) マクギ(獵師)といふ言葉がアイヌ語にありますか。冬爲といふ語源説は成立しないでせうか。

答(九) マタギは日本語でアイヌ語ではありません。アイヌは口にしますけれど、勿論日本語と意識して使つてゐます。冬爲といふ御説、随分奇僻です。

問(十) 行者にんにくをキトビルと言ひますか。巴氏の辭典には、Kito, Kila, Pukusa だけあります。

答(十) 行者にんにくはキトビルといひますが、日本語で、アイヌ語では Pukusa です。キトといふ所は、或は入口地方の方言にでも告あつて、松前地方の人は、キト蒜と覺えて使つて、松前方言となつてゐたものでもありませうか。日高地方のアイヌはキトビルは和語だと思つて居ります。

問(十一) 略す。

答(十一) サツタチ、ネネッブ、アイヌに思ひつきません。ネネッブといふ語形はアイヌ語的であり、サツタチの方は和語臭があるではありませんか。

問(十二) 「アイヌの話」に、シト、シトキ(餅)とあり、「蝦夷語箋」には「餅 シツト」とあります。どんな餅でせう。

答(十二) アイヌが *shito* といひますのは青森方言シトで、和名炒の漿のことです。米の粉を湯ででち、手の平で丸めて押しつぶし、うでゝ、そして、乾したものです。一寸、米團子です。そのまゝも食べ、又ホド焼などにしてもたべます。葬送の日は、内地の饅頭のやうに來る客へ、たくさんやりま

す。熊送りの時にも。(熊送りも又、一つの葬送ですから)。

問(十三) 「貸す」をイルサといふのは日本語のイラスと關係があるといふ人がありますが、果して然らば「借りる」のイラフもある筈。

答(十三) 貸すをエルサといふのは、日本語のイラスと關係はありますまい。従つて、

果して然らば「借りる」のイラフもある筈、も成立ちますまい。

少しも無理な註文ではなく、アイヌは一一和語だと思つてつかつてゐるか、アイヌ語だと信じてゐるかは、絶えず、アイヌの腹へあたつて見てゐますから、一々は。きり申せましますものとみです。

問(追加) 「蝦夷語箋」に

かすべ カシユヘ
かしゆべ

とあります。カスベとは赤えひの事ですか。又、これは日本語とアイヌ語とどちらが先でせう。

答(追加) 「蝦夷語箋」の原本の藻汐草の方には、

かすべ　カシユベ　ウ、タフ

と有之、このウ、タフはコシユベのことで、赤えいのことです。カシユベ、カシユンベなどいふのは南部や津軽から行つた松前人の方言をアイヌのつかふので、本當のアイヌ語はニギマツの方です。